

勿凝学問 205

本日の日経案は？の問い合わせ
社会科学と刷り込みの理論

2008年12月12日
慶應義塾大学 商学部
教授 権丈善一

いささか旧聞に属する話であり、みなさんはすでに忘れてしまっているかもしれないが、たしか12月8日月曜日のことであつたと思う——日経新聞が年金改革案を出していた。昼近く、ある新聞記者さんから、次の問い合わせがきていた。

-----Original Message-----

Sent: Monday, December 08, 2008 11:36 AM

To: Y Kenjoh

Subject: 本日の日経案は？

権丈さま

高齢者医療検討会、勉強になりました。まだ理解できていないところもあるかも知れませんが。

ところで、今日の日経の年金2次提言はどんなふうにご覧になりますか。

...

医療介護の効率化を求めるのは、ちょっと無理ではないか、という気もするのですが。

僕からの返事。

-----Original Message-----

From: Y Kenjoh

Sent: Monday, December 08, 2008 11:58 AM

Subject: RE: 本日の日経案は？

日経、阪大財政学グループ、一橋年金研究グループにICU
すごいですねえ（笑）。

1月7日に日経案が出されたときは、メンバーに宮島洋先生がいたから、僕の仮説の成立

が危ぶまれましたけど¹、今回は大丈夫みたいです。

ちなみに、どこの大学を卒業したかが大切。二十歳の頃に何を見たかが重要なんだよね。刷り込みの理論、社会科学では決定的に重要な役割をはたします（土居さんは井堀さんが阪大教授だったときの学生。小塩さんは阪大卒ではなく博士号が阪大なんだけど、誤差のうち）。

社会科学ってのは、科学というよりは本当はアートなんですよ（笑）。

よく慶應の先生にはいろいろいますねと言われるんですけど、慶應大学を卒業しているかどうかは実は決定的に重要。Ⅲ巻 601 頁にある〈座談会とわたくしの教育観〉をご参照下さい。

なお、上記メール中の僕の仮説とは次。

2006, June 「[公的年金における世代間格差をどう考えるか——世代間格差論議の学説史的考察](#)」[LRL(Labor Research Library), No.11, 5 頁]より[『医療年金問題の考え方——再分配政策の政治経済学Ⅲ』179-80 頁]

ところで、日本経済新聞社は、コトリコフの2冊の著書『世代の経済学』（1992）、『破産する未来』（2005）を翻訳するのみならず、その間に同社は、阪大博士号取得者である小塩隆の『年金民営化の構想』（1998）、当時阪大にいた八田の共著『年金改革論——積立方式に移行せよ』（1999）なども上梓した。八田・小口『年金改革論』は、第42回日経・図書文化賞を受賞しており、読者は研究者のみならずサラリーマンにまで広範囲に及ぶことになる。

...

こうした学説史的な概観から帰納してみると、日本の公的年金論議が他国と比べて奇妙かつ自虐的な形になってしまったのは、日本経済新聞社、阪大財政学グループ、一橋年金研究グループの精力的かつ秀でた活躍に原因があったのではないかという作業仮説を立てることができそうなのである（他に村上雅子を含むICU〔国際基督教大学〕グループというのもあるのだが、ここでは割愛する）。

参考資料

勿凝学問 201 [年金専門家が言っていることを理解できない僕は年金専門家ではないんだろう、きっと——歴史は繰り返す？](#)

（上記、勿凝学問 201 中の付録Ⅱもご参照あれ）

¹ 宮島先生は「経済教室」に書きたいと自ら提案され、「年金改革 介護・医療にらみ一体改革で」（日経新聞 2008 年 1 月 17 日）の中で日経案をみごとに批判されていた。ゆえに一月段階でも、わたくしの仮説は棄却はされていなかった。